

KONAN UNIVERSITY

第43回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体 研究会「大学教育におけるアクティブラーニング」

雑誌名	言語と文化
号	22
ページ	321-326
発行年	2018-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00003104

第43回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会 大学教育におけるアクティブラーニング

第43回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会は、『「わかった」を引き出すアクティブラーニング』というテーマで、2017年6月24日（土）午後13時から2号館1階「グローバルゾーン・ポルト」で開催され、39名の参加者があった。

- ◆ 開催日時 2017年6月24日（土）13時～14時50分
- ◆ 受付時間 12時30分～
- ◆ 開催場所 研究会&懇親会 甲南大学2号館1階グローバルゾーン・ポルト
- ◆ 次 第 〔司会：国際言語文化センター教授 藤原三枝子〕
- 13:00 開会の挨拶 国際言語文化センター教授 中村耕二
- 13:05～14:10 講演
『「わかった」を引き出すアクティブラーニング』
関西大学教育推進部教授
森 朋子
- 14:10～14:20 休憩
- 14:20～14:40 質疑応答
- 14:40 まとめと閉会の挨拶 国際言語文化センター講師 野村幸宏
- 14:50 懇親会

講演

『「わかった」を引き出すアクティブラーニング』
～深い理解を促すアクティブラーニングのデザイン～

関西大学教育推進部教授 森 朋子

1. はじめに

アクティブラーニングとはなにか。これまですでに取り組まれてきた学生が主体的に取り組む様々な方法を包括するいわゆる傘概念であることから、一言で表すことも難しい。本稿はそんな中でも、著者の専門である学習研究の観点からアクティブラーニングについて論じるものであり、著者自身が教育学習の現場である授業において授業担当者と協働で学習研究を展開した結果からの知見をまとめるものである。

なぜアクティブラーニングが必要なのかと聞かれれば、著者はその答えを以下の4点でお答えをしている。

- ① 大学という場の認識の変化
- ② 学習における新たな評価軸の登場
- ③ 日本の教育政策による一体化改革
- ④ 深い理解の促進

まず①は、まさに大学は「何を教えたか」ではなく、その結果、「学生が何を学んだか」を教育の成果として再認識する動きである。②は、学力そのものが捉えなおされている中、従来の知識のみならず、その知識を活用するコンピテンシーが新たな賢さの指標として登場した。③はこれまでは大学は大学、高校までとは別といった形で分断されていた日本の教育政策が、ようやく小学校から大学までの一体改革に乗り出した。そして④である。学習研究者としてお伝えしたいのは、まさにアクティブラーニングを導入し、自らの思考を外化することによって、深い理解が促進される。

2. アクティブラーニングの現状

しかし多くの実践でもなかなかそれがうまく行かない。2つの大きな課題が表面化している。まずは、思考と活動の乖離である。これらの原因は、外化（アウトプット）を重視するために生じた内化（インプット）の不足である。そして次はグループワークに表れるフリーライダーの存在である。授業を参観した結果によれば、フリーライダーには2つのタイプがあることが明らかになった。〈意図したフリーライダー〉と〈無意識なフリーライダー〉だ。前者は活動と思考、双方ともにグループ活動に参加しておらず、教師やファシリテーターからもその状況は目に見えてわかりやすい。結果、声掛けや作業の確認などの教師側からの介入によって多少の改善がみられるのが特徴だ。しかし深刻なのは後者の

〈無意識なフリーライダー〉である。グループ学習は往々にしてリーダーシップを発揮する数名の学生によって進められる場合がある。その場合、一人ひとりのメンバーがじっくり考える間もなく次々と提案がなされ、段取りが組まれていく。この状況では、思考が活性化する学生とそうでない学生の間に差が広がるばかりである。これでは個々の理解は深まらない。一斉授業からアクティブラーニングへの転換で乗り越えたと思っていた学習の格差は、アクティブラーニングにおいてもこのような形で残存しており、アクティブラーニングでは成績が伸びないと漏れ聞こえる噂の根拠はまさにここにあると著者は考えている。

ではどうしたらよいのか。溝上（2014）は、方法も内容もどちらも深さを求めるべきであり、松下（2015）ではそれをディープ・アクティブラーニングと名付けている。知識の習得とコンピテンシーの育成、双方を促すアクティブラーニングのあり方を検討する必要がある。

3. 深い学びを促す授業デザイン

この2つの課題を解決した授業に共通したデザインが①内化と外化の往還、そして②個人の思考を基盤としたグループである。

3.1 内化－外化－内化

内化はいわゆるインプットであり、外化はそれを活用するアウトプットである。これまでも授業において、教員が教え（インプット）、それを学生が演習（アウトプット）する、といった活動が多くデザインされてきた。そんな中で、さらなる理解の深さが得られるアクティブラーニング型授業の共通のデザインは、必ず最後にもう一度、十分な内化の活動を含んでいた。

内化は、まさに思考をアクティブにするための事前知識や素材をインプットすることを目的とするものであり、それによってまずは学生の「わかったつもり」を作る。次に外化というアクティブラーニングにおいて、グループメンバー個々の「わかったつもり」に触れることで、自分と他者の差が明らかになる。そこでは自らの「わかったつもり」に混乱や躊躇、葛藤といったゆらぎが生じ、まさに認知的学習論でいう「なぜ？」が生じた状態である。そこでようやく学習が想起するのだ。でも多くのアクティブラーニングの授業がここで授業を終えてしまっているのだ。そうするとコンピテンシーのみ育成を促したことになる。最後に内化として外化で生じた疑問を教員が吸い上げ、学生の思考よりも一段高い認知レベルにおいて解説、総括を行うことによって、「わかったつもり」を再構築した「わかった」に導くことが可能になる。

3.2 個人－グループ－個人

この状況を作るためには、個人の思考を基盤としたグループ学習が必要である。個人－グループ－個人というプロセスによって〈無意識なフリーライダー〉を出現させない。まずは内化において個人の「わかったつもり」を作り、グループ学習ではそれらをシェアす

る。そうすると個々理解は違うという認知的学習論の前提があるので、メンバー人数分だけの「わかったつもり」が集まることになる。ここでの葛藤や躊躇を議論によってすり合わせていくこの過程が、まさにコンピテンシーを育成し、思考を深くする。この活動においては、グループなりの「わかったつもり」を作ることを目指し、成功するグループもあるが、失敗を経験することもある。ただ成果は過程にあり、その結果は、すべて最後の内化における個人の理解に結実することになる。最初の内化における個人の理解は、グループで外化するアクティブラーニング活動を通じて変容し、内化された理解は最初に比べて格段に深くなるのだ。

4. おわりに

これまで学習と言えば、浅い表面的な知識を幅広く学習する累加（増えること）が中心であった。しかしこれからの学習は、まさに知識が増えるだけにとどまらない。知識の量は少なくとも、一度、獲得した「わかったつもり」に、他者とのかかわりの中でゆらぎを与え、再度、それらを作り変えていくことで、再構築型の学習が達成される。まさにこの学習観が21世紀型なのだ。

大学入試はまさに変わろうとしている。ゆっくりかもしれないが、その方向性はもう変わらない。社会が知識基盤型となり、解のない問題に取り組む人材育成が不可欠である今、教育政策のみならず、小学校から大学までの連携によってさらに推し進めることが望まれる。課題は多々あるが、「わかった」を勝ち取った時の学生の表情を見れば、私たち教員はその改革を推し進められるはずである。

引用文献

- 松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニングー大学授業を進化させるためにー』勁草書房。
溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。

質疑応答

講演後、以下のような内容で参加者と講演者の間で活発な質疑応答が行われた。

フロアからの質問

■ いつ学生の達成度を評価するのが良いのか？

〈森氏〉

評価は最後に一回行うのではなく、形成的評価によりつねに評価を行いながら学習の深まりを捉えていく必要がある。例えば、小テストを頻繁に実施し記述式を取り入れて、学

習者の理解を教師が把握しフィードバックを行い、期末テストで最終的な理解を評価することが考えられる。すべてにアクティブラーニングを取り入れることは時間的な制約もあり難しいことから、選択と集中、学習内容の濃淡を考えるコースデザインが大事になる。

■ グループワークのコツについて：グループワークでは、分かってほしい学生と意欲的な学生が混在し、意欲的な学生が不満を感じる場合がある。どのような対処法があるか。

〈森氏〉

学力の諸要素とグループワークの仕組みを学生に説明し、活動の意味を学生と共有することが考えられる。学力には「見える学力」、「見えにくい学力」、「見えない学力」の3要素がある。グループワークにより「個人のわかったつもり」をシェアすることで、理解の違いに気づき深い学びにつながることで、コミュニケーション能力や違いを統合する力などの見えにくい学力を発展させることができること、グループワークは「学びを学ぶ」力などの見えない学力をつけることに有効であることを学生が理解することで、学習に対して学生も責任をもつようにすることが必要だろう。

■ 反転授業の動画作成に際しての考えを聞かせていただきたい。

〈森氏〉

反転授業で事前にまず学生が個人で「わかったつもり」をつくり、授業ではその知識に基づきアクティブラーニングにより深い学びにつなげることができる。ただ、反転授業の教材はすべて自分で作成しなくても、例えばネット上で提供されているものを使用しても良いだろう。また授業で使うパワーポイントに音声を入れ込み、学生に提供することも考えられる。いずれにせよ、授業では最後に教師がしっかりと総まとめを行う内化のプロセスが欠かせない。内化・外化・内化のプロセスにとって反転授業は効果的であるが、学生の立場で考えるとすべてが反転授業であると学習が大変になるので、反転授業を取り入れる科目を話し合いによって決めるなどのコースマネジメントが必要だろう。

■ 「プロセス重視の学習」や「学びの共同体」など、教育にとって効果的なアプローチがあると思う。また、例えば先輩の良いプレゼンテーションをモデルとして示すことで学生たちの内発的動機づけを高めることができると思うが。

〈森氏〉

アクティブラーニングは特定の教育法ではなく、学生の思考を活性化するための大きな〈傘概念〉である。学びの共同体を作るためには初年次教育が大事である。中学・高校で行われているような活動・イベントは、大学教育にとっても参考になるものがあるかもし

れない。また、学びには自己効力感が重要であるが、英語については高校までの学習で「できる」「できない」などのラベルを貼っている場合が多い。大学ではじめて学ぶ第2外国語は自分に新しいラベルを貼りなおす良い機会かもしれない。さらに英語と英語以外の言語がコラボレーションして新しい学びの可能性を探っていくことも考えられる。

研究会を終えて

講演の最初に、今後事務系職業の多くが人口知能にとって代わられる可能性があるという調査結果が示された。知識基盤社会にとって必要とされるのは、教えられた知識を累積する能力ではなく、「意味を深く理解し、自らの実体験に基づいて、論理的、創造的に推論できる力」であるならば、私たち教師の仕事は、そうした能力を身につけた学生を社会に送り出すことにある。講演により、学生個人の深い理解につながるようなグループワーク、インプット（内化）を経てアウトプット（外化）へそしてインプット（内化）への往還のプロセスを意識した授業の必要性和有効性を理解することができた。学生たちだけでなく、私たち教える立場にある者も、この研究会で得たインプット（自分のわかったつもり）を同僚とのコミュニケーションによって外化し、多様な意見を聞きそれを統合する内化のプロセスを大事にしたい。そうした能力は私たち教師にも求められている。

研究会の最後に開催された懇親会は、穏やかな雰囲気の中で、質疑応答の時間に扱えなかったテーマについて講演者と参加者が意見交換をする良い機会となった。最後まで精力的にお話しいただいた講演者の森先生と、この研究会に足を運んでくださった皆さま、遠方からもご参加いただいた先生方にこの場をかりて感謝を申し上げたい。

（文責：藤原三枝子）